

羅什訳『法華経』の語学的研究

—接続詞“即”“則”“乃”“便”について—

椿 正美

0. はじめに

古典漢語で用いられる接続詞“即”“則”“乃”“便”は、順接の関係にある部分の連結に機能を発揮し、我が国の訓読法では、何れにも読み方として「すなわち」が与えられる。例えば『論語』「学而」“行有余力則以学文（「行ひて余力有らば則ち以て文を学べ」）。”では、前部“行有余力”と後部“以学文”に於ける因果関係の成立が“即”の挿入により強調されている。

“即”“則”“乃”“便”は使用条件が類似し、しかも共通の読み方を有するため、読み手はこれらの語彙が全くの同義語であるかのような印象を受ける可能性もある。しかし、それぞれの字義・字形や使用条件について更に細かく分析すれば、各語彙の間には微妙な違いも新たに発見されるので、それらは類義語の関係にあると認めるべきである。

例えば『史記』「項羽本紀」“先即制人、後則為人所制（「先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人に制せらる」）。”には“即”“則”の併用が確認されるが、その存在は両語彙の使用条件に微妙な違いがあることを意味している。全体の文意をより正確に解釈するためには、その部分についても考慮する必要がある。

本稿では、鳩摩羅什（Kumarajiva）訳『妙法蓮華経』全7巻（以後は略称『法華経』を使用）の文中に見られる、接続詞“即”“則”“乃”“便”の用例を調査対象とし、それぞれの使用条件と効果について探る。

1. 即

1. 1. 字義・字形

“即”を形成する偏の部分の旧字体“卽”は、上に蓋を加えれば“食”となる。更に、傍の部分に当たる“卩”は、人が跪坐する様子を描写している。このことから、白川1996：1010は“即”が食膳の前に人の坐する形を表すと指摘し、それについては『説文解字』にも“即食也（「食に即くなり」）”と記されている。従って、“即”は全ての者が着任することを意味し、接続詞の場合は前後の現象の直結した発生を表す。

例えば『史記』「項羽本紀」“項王許之、即婦漢王父母妻子（「項王之を許し、即ち漢王の父母妻子を婦す」）。”では、項王の判断を表現する“許”が先に掲示され、それに続く行為の描写“婦父母妻子”が“即”により連結されている。この場合でも2つの行為の発生時期には緊密性が感じられ、直結を表示する“即”独特の機能が発揮されたと捉えられる。

1. 2. 行為を表す動詞に於ける連続性の強調

順接を示す接続詞としての“即”の表示機能は、発生時期に連続性が認められる複数の動詞の連結例に効果をはっきりと見ることができる。次に例文を挙げる¹⁾。

(1)T09-0020C

一心合掌、瞻仰世尊、目不暫捨、即共同声、而説偈言。(授記品)

一心に合掌し、世尊を瞻仰して目暫くも捨てず、即ち共に声を同じうして、偈を説いて言さく。

(2)T09-0023B

頭面礼仏、遶百千帀、即以天華、而散仏上。(化城喻品)

頭面に仏を礼し遶ること百千帀して、即ち天華を以て仏の上に散ず。

(3)T09-0023B

歡喜踊躍、生希有心、即各相詣、共議此事。(化城喻品)

歡喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣って共に此の事を議す。

(1)の“合掌”と“説”、(2)の“遶”と“散”、(3)の“生”と“議”は連続して発生する複数の行為を表し、“即”の機能は各動詞の間に成立する連続関係の強調と捉えられる。ここに見られる関係の成立には、単なる行為の連続性だけでなく、“即”後部に掲示された内容の発生の要因が“即”前部に記述されることも条件として認められる。

『法華経』全文中には、前部で表された行為や現象の発生に対する反応の内容が後部に示され、その両者が“即”によって連結された例も多く見られる。次に例文を挙げる。

(4)T09-0012B

長者見是大火、從四面起、即大驚怖、而作是念。(譬喻品)

長者是の大火の四面より起るを見て、即ち大に驚怖して是の念を作さく。

(5)T09-0018A

遙見其子、默而識之、即勅使者、追捉将来。(信解品)

遙かに其の子を見て、黙して之を識る、即ち使者に勅して、追ひ捉え將いて来らしむ。

(6)T09-0053A

得此三昧已、心大歡喜、即作念言。(藥王菩薩本事品)

此の三昧を得已って、心大に歡喜して即ち念言を作さく。

(4)の“見”と“作”、(5)の“識”と“勅”、(6)の“得”と“作”は、根拠となる行為や現象、それに反応した結果として発生する内容に当たる。ここで“即”によって強調されることは、両者間に於ける因果関係の成立と捉えられる。

1. 3. “即”前後部の内容に成立する因果関係の表示

以上のように因果関係を表示する機能は、原因や理由に当たる部分の揭示に重点が置かれる文も構成する。そのような場合には、“即”前部に“以”“故”等が付加される。次に例文を挙げる。

(7)T09-0056C

称其名故即得解脱。(観世音菩薩普門品)。

其の名を称するが故に即ち解脱することを得ん。

(8)T09-0061B

以見我故、即得三昧、及陀羅尼。(普賢菩薩勸発品)

我を見るを以ての故に即ち三昧及び陀羅尼を得ん。

(7)では“即”前部の内容に“～故”が後続され、(8)では更に“以”が配されている。

このような表現は、仮定関係の表示にも応用される。その場合は、仮定を示す接続詞“若”との連用によって“若～即～”が構成される。次に例文を挙げる。

(9)T09-0054C

若人有病、得聞是経、病即消滅、不老不死。(薬王菩薩本事品)

若し人病あらんに是の経を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

(10)T09-0056C

若為大水所漂、称其名号、即得浅處。(観世音菩薩普門品)

若し大水に漂わされんに、其の名号を称せば即ち浅き處を得ん。

(9)(10)共に“若～即～”が構成され、仮定に当たる部分の内容が明確にされている。仮定の内容に重点が置かれた文体では、後続する内容との強い連結の表示が必要であり、そのためには“即”が発揮する直結の機能の適用が相応しく、このような用例が構成されたと考えられる。

2. 則

2. 1. 字義・字形

“則”は“鼎”と“刀”の略字によって構成された会意文字であり、肉等を入れた鼎にナイフを添えた様子が描写されている。基本的には2つの事物が接して離れない意が示されるが、転じて人々が常に従う「法則」の意に用いられ、前部と後部の内容を連結させる接続詞としての機能も発揮すると見られている。

例えば『孟子』「告子」“求則得之、舎則失之(「求むれば則ち之を得、舎つれば則ち之を失ふ」)。”では、“求”と“得之”“舎”と“失之”が“則”により連結されている。この場合も自発的な行為とそれを受けて発生する現象との因果関係が示され、その関係が成立する必然性の存在が

“則”挿入により明確にされている。

2. 2. “則”前後部の内容に存在する強い必然性の表示

“則”は基本的に“即”と使用条件が殆ど同じであり、王力1962:137も両者の近似性を認めている。因果関係にある2つの内容が“則”により連結された例を次に挙げる。

(11)T09-0006C

聞仏所説、則能敬信。(方便品)

仏の所説を聞きたてまつらば則ち能く敬信せん。

(12)T09-0048C

種種所塗香、聞則知其身。(法師功德品)

種種の塗れる所の香、聞いて則ち其の身を知らん。

(11)(12)共に“聞”が要因に当たり、(11)では“能敬信”、(12)では“知其身”が結果に当たる。“則”は行為の内容とそれにより可能となる現象との因果関係の表示に機能を發揮している。

このような表現の成立は、“則”前後部の内容が極めて密接な関係にあることが条件となり、上に述べた「法則」の意味が活用されたと考えられる。王力1958:338も“則”の用法として〔緊縮された句(sentence)〕への挿入を挙げ、前部の内容は時間の修飾または条件の制限を表示すると指摘している²⁾。

この機能は仮定関係の表示にも応用され、その効果を發揮している。次に例文を挙げる。

(13)T09-0025A

無明滅則行滅。(化城喻品)

無明滅すれば則ち行滅す。

(14)T09-0052C

汝等若能如是、則為已報、諸仏之恩。(囑累品)

汝等若し能く是の如くせば、則ち為れ已に諸仏の恩を報ずるなり。

(13)では“無明滅”と“行滅”、(14)では“能如是”と“報諸仏之恩”が連結されている。ここでは、両者間に仮定と結果の関係が成立する必然性が“則”により強調されたと捉えられる。

3. 乃

3. 1. 字義・字形

“乃”の字義については『説文解字』に“曳詞之難也(「詞を曳くことの難きなり)」。”とある。但し、白川1996:1038はそのように象形的に表現し得るものではないと判断し、弓の弦を外した形と解釈して「因仍(いんじょう)」が語義に当たると指摘している。そして語気の上で緩急や難易の辞に副詞的な語として用いられ、状況によって用義が定まることから、順接として

「すなわち」の意になったと主張している。

例えば『戦国策』「韓」“非独聶政之能、乃其姉者列女也（「独り聶政の能のみに非ず、乃ち其の姉なる者も列女なり）」。”では、前部の内容“非・・・能”と後部の内容“其・・・也”が“乃”により連結されている。この場合は、同じ状況について“乃”前部では内容の限定が否定され、後部では内容の拡張について表示されているので、両者間の関係には因仍という要素も含まれると捉えられる。

3. 2. 行為や現象を発生させる条件と結果の連結

既に挙げた“即”“則”と同様、“乃”も前部と後部の内容に成立する因果関係の強調に用いられることが多い。『法華経』文中には、“乃”後部つまり結果に当たる部分が可能表現によって形成される例も見られ、その場合は前部の内容が後部を導くための条件となる。次に例文を挙げる。

(15)T09-0039A

常行忍辱、哀愍一切、乃能演説、仏所讚経。（安樂行品）

常に忍辱を行じ、一切を哀愍して、乃ち能く仏の讚めたもう所の経を演説す。

(16)T09-0055C

行此三昧、乃能見是菩薩、色相大小、威儀進止。（妙音菩薩品）

此の三昧を行じて、乃ち能く是の菩薩の色相の大小、威儀・進止を見ん。

(15)(16)共に動詞“行”によって条件が構成され、それらの結果として(15)では〔“能” + “演説”〕、(16)では〔“能” + “見”〕が“乃”に後続されている。ここに見られる条件と結果の連結には、既に掲げた「因仍」の機能が發揮されたと考えられ、特に可能表現によって形成された場合には、その効果ははっきりと表れている。

『法華経』文中には、“乃”前部で時間的条件や地理的条件の変化について揭示された用例も見られる。その場合には、条件の変化に伴い発生した結果が後部で描写され、やはり因果関係の成立が表示されている。次に例文を挙げる。

(17)T09-0012A

仏昔於波羅捺、初転法輪、今乃復転、無上最大法輪。（譬喩品）

仏昔波羅捺に於て初めて法輪を転じ、今乃ち復無上最大の法輪を転じたもう。

(18)T09-0022B

過於千国土、乃下一塵点。（化城喩品）

千の国土を過ぎて、乃ち一の塵点を下さん。

(17)では“初転”と“復転”が“乃”により連結され、“昔”から“今”までの変化について記されている。(18)では“過”と“下”が“乃”により連結され、通過地点に当たる“千国土”につ

いて記されている。何れの場合でも“乃”は前部と後部の強い関連性を強調し、(17)では時間的条件の変化に伴う状況の拡張、(18)では地理的条件の変化に伴う状況の進展が表現されている。

4. 便

4. 1. 字義・字形

『説文解字』には字義について“安也。人有不便更之（「安んずるなり。人、不便なること有るときは之れを更む）」”、字形について“従人更（「人と更とに従ふ）」”とある。“更”は「丙」と「支」からなる会意文字であり、物事が硬く張っている様子を表現するので、“便”には人がそれを角張らず通り易い状態に改めた意が含まれ、順接の表現に用いられたと判断される。

例えば、陶淵明「桃花源記」“林尽水源、便得一山（「林、水源に尽き、便ち一山を得たり）」”では、眼前に見られる自然現象“林尽”と主体の行為“得一山”という2つの描写が“便”により連結されている。この場合は、両者の発生が連続的なものであることが強調されたと捉えられる。

4. 2. 行為や現象の発生が継続された状況の表示

“便”は複数の行為を表す動詞の連結に用いられ、それらの行為が滞りなく連続的に発生することを示す。次に例文を挙げる。

(19)T09-0010C

初聞仏法、遇便信受、思惟取証。（譬喩品）

初め仏法を聞いて遇便ち信受し、思惟して証を取れり。

(20)T09-0043A

必当生於、難遭之想、心懷恋慕、渴仰於仏、便種善根。（如来寿量品）

必ず当に難遭の想を生じ、心に恋慕を懐き、仏を渴仰して便ち善根を種ゆべし。

(19)では“聞”と“信受”、(20)では“渴仰”と“種”が連結され、それぞれが発生する状況が継続されたものであることが“便”によって示されている。

この構文では、“便”前部で条件に当たる部分を揭示し、結果に当たる内容を後部に続け、かなり高い確率を伴う仮定関係を表示させることもできる。次に例文を挙げる。

(21)T09-0025C

若如来自知、・・・深入禪定、便集諸菩薩、及声聞衆、為説是經。（化城喩品）

若し如来自ら・・・深く禪定に入れりと知りぬれば、便ち諸の菩薩及び声聞衆を集めて、為に是の経を説く。

(22)T09-0057A

常念恭敬、觀世音菩薩、便得離欲。（觀世音菩薩普門品）

常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離るることを得ん。

(21)では“知”と“説”、(22)では“恭敬”と“得”が仮定と結果の関係にあり、それぞれが“便”により連結されている。特に(21)の場合は前部の内容に“若”が前置され、明らかに仮定の部分の表示に重点が置かれている。

黎錦熙1992：206によれば、順接を示す接続詞は、物事や勢力が互いに接する状態の表示に重点を置く種、物事や効果が他方を原因とする状態の表示に重点を置く種に分類され、“便”は後者に含まれている。以上挙げた用例でも、“便”は2つの内容の継続を表示し、その機能は仮定の表現にも応用されている。

3. おわりに

以上、“即”“則”“乃”“便”それぞれの語義や使用条件について、『法華経』文中の用例を対象として調査した。何れも順接を示す接続詞であり、2つの行為や現象の連続関係や因果関係を強調するという基本的な機能は似ている。しかし、それらの字義・字形や先行研究の結果等に基づき、表示機能について更に調査を進めた結果、各語彙の間には微妙な意味上の違いが存在することも判明した。

例えば、「法則」の意味が含まれる“則”ならば、前部の内容に後部の内容が後続するに当たり、その必然性の表示が機能として発揮される。しかし、字義に滞りのない流れの意味が含まれる“便”ならば、前部から後部へ内容が何ら妨げもなく継続される状況の表示に重点が置かれている。従って、“則”と“便”は、類似した機能を保持してはいるが、用法については微妙な違いもあると判断された。

もし、読み手が“即”“則”“乃”“便”が全て同義語であるという印象を抱き、単純に連続関係の表示という機能のみを重視して用例の解釈を試みた場合、その接続詞が選択された根拠まで理解が及ばない可能性は高い。全文に対する正確な解釈を達成するためには、このような接続詞を使い分ける条件も決して軽視してはならないと思われた。

〈注〉

- 1) 各例文の直前には、『大正新脩大藏経』（全83巻、1925年初版、大正新脩大藏経刊行会）の中で該当部分が記された巻数と頁数を付した。また、参考として『訓訳妙法蓮華経并開結』（井上四郎編輯、1957年初版、平楽寺書店）に見られる書き下し文も例文の直後に掲示した。
- 2) 王力1958：338では、“則”の用法について、同じ接続詞である“而”の用法と比較され、“而”は〔简单句〕、“則”は〔緊縮句〕に適用されると述べられている。

〈参考文献〉

- 王力 1958. 『漢語史稿（中冊）』 科学出版社。
王力 1962. 『古代漢語（第三冊）』 中華書局。
白川静 1996. 『字通』 平凡社。
藤堂明保 1978. 『漢和大辞典』 学習研究社。
黎錦熙 1992. 『新著国語文法（漢語語法叢書）』 商務印書館。

〈キーワード〉 接続詞、順接、連結、連続関係、因果関係